

# SHOW HEY シネマルーム



## Data

監督：小泉徳宏  
出演：蒼井優 / 竹内結子 / 田中麗奈  
/ 仲間由紀恵 / 鈴木京香 /  
広末涼子 / 塩見三省 / 真野  
響子 / 大沢たかお / 河本準  
一 / 長門裕之 / 井ノ原快彦

## 👁️👁️ みどころ

1936年から3つの時代の命をつないだ6人の女性たち。そこにはどんな営みが？「あの時代は良かった」の感慨も、閉塞ニッポンの嘆きも、女性の強さの前にはひれ伏すはず。

対比したいのは、激動する中国の3つの時代を生きた茉（モー） 莉（リー） 花（ホア）を章子怡（チャン・ツイイー）が一人で演じた『ジャスミンの花開く（茉莉花開 / Jasmine Women）』（04年）。1対6の対比もさることながら、出産にまつわる女の闘いと女の幸せは日中共通だと痛感！

「保守的」との批判は当然だが、本作が今ドキの若い女性の結婚離れと子供はいらぬ症候群の歯止めになれば・・・。

## あちらは1人、こちらは6人。その比較は？

本作は、1936（昭和11）年、1964（昭和39）年、1969（昭和44）年、1977（昭和52）年という昭和の高度経済成長の時代、そして2009（平成21）年の今、と時代を大きく3つに分けて女性の生き方を問うている。これと似たようなテイストの中国映画の名作が、侯咏（ホウ・ヨン）監督の『ジャスミンの花開く（茉莉花開 / Jasmine Women）』（04年）だった。

これは上海を舞台として、1930年、1950年そして1980年という3つのポイントの時代を、章子怡（チャン・ツイイー）1人が茉（モー） 莉（リー） 花（ホア）の三役を務め、その熱演で2004年の中国電影金鷄賞の最優秀女優賞を受賞した作品（『シネマルーム17』192頁参照）。それに対し『FLOWERS』には、1936年から2

009年までの73年間に3代6人の女優が登場する。1人の女優をじっくり見るのも一興なら、6人の女優の美しさと生きざまを比較するのも一興だから、その視点からは優劣はつけられない。

『ジャスミンの花開く(茉莉花開/Jasmine Women)』も『FLOWERS』も、3代の女性の生き方を描いたが、これはきっと激動する時代の中でこそ女性の生き方が明確に浮かび上がるため。その視点からみると、『ジャスミンの花開く(茉莉花開/Jasmine Women)』はまさに激動する時代の3つのポイントを的確にとらえていたが、『FLOWERS』はあえてそのポイントをはずしている感がある。私なりに激動した日本の3つのポイントをとらえれば、第1は1941~1945年の戦争の時代、第2は1960年代後半からの元気な高度経済成長の時代、そして第3は1990年代のバブル崩壊の中、内向き志向が強まり、政治的、経済的に混迷を深めていった時代だ。ちなみに平成21年は、第3の時代の延長線。

そんな3つの激動期をポイントとして選べば、それぞれのポイントで(サラリーマンの)お父さんの生き方が問われたのと同じように女性の生き方も問われたから、その比較がより鮮明になったのでは?すると、その視点からは『FLOWERS』より『ジャスミンの花開く(茉莉花開/Jasmine Women)』の方が刺激的?

## 女性の生き方の最大の分岐点は、出産!

女性の生き方の最大の分岐点になるのは、古今東西を問わず、出産。『ジャスミンの花開く(茉莉花開/Jasmine Women)』では、激動する時代の中、茉、莉、花という3代の女性がドラマチックな恋愛と出産を経験した。とりわけ、花が雨の中路上で自らの力で出産するシーンは圧巻だった。

本作で出産がテーマとなる女性は、奏(鈴木京香)と慧(仲間由紀恵)。2009年の今ピアニストへの夢を絶たれ、恋人とも別れてしまった奏のお腹には赤ちゃんが。奏はシングルマザーとして出産することに大いに悩んだが、さてその決断は?他方1977年、母体の健康がおぼつかない中、慧の2人目の赤ちゃんの出産に反対するのが夫の晴夫(井ノ原快彦)。「既に5歳の長女・奏がいるのだから、今のままで十分幸せ」というのが晴夫の言い分だが、さて慧の決断は?

## 恋と結婚も、大きな分岐点!

出産とともに女性の生き方の大きな分岐点になるのが恋愛・結婚。一昨年のNHK大河ドラマ『篤姫』はその典型で、薩摩藩島津家の一門に生まれ、島津本家の養女となった篤姫は、江戸幕府第13代将軍・徳川家定と結婚したことによって天璋院への華麗なる変身を遂げた。本作において恋と結婚に悩むのは、凜(蒼井優)と翠(田中麗奈)

映画冒頭、1936年という時代が表示される。これは日中戦争が本格的に始まる直前

の年だ。以降大日本帝国は軍国色一色に染まり、日中戦争から太平洋戦争に突入していくわけだが、明日に結婚式を控えた凜にはそんな危機感はない。父親・寅雄（塩見三省）と母親・文江（真野響子）が見守る中、女学校を出たため進歩的な考え方をもち凜が悩むのは、会ったこともない相手との結婚。婚礼当日になって花嫁衣装のまま家を飛び出した凜に父親は激怒したが、凜の気持を温かく見守っている母親と、ある思い出の場所で出会った凜は、やっと気持の整理が。こんな風にイヤイヤ結婚した凜でも、その後薫（竹内結子）、翠、慧という3人の女の子に恵まれたから、戦争中も何とか幸せに暮らしたらしい。

恋に悩む女性のもう1人は、大手出版社に勤務し、エロ小説を書いている作家・遠藤（長門裕之）への原稿催促に励む凜の次女・翠。時は1969年。彼女は当時流行の最先端だったウーマンリブ思想の塊だから、何かと衝突する場面も多い。ところが、一途に翠を愛している菊池（河本準一）からプロポーズされると、なぜかそんな翠の心が乱れたから女心は不可思議？

## 女は強い！この2人からそれを実感！

本作で意外に存在感が乏しいのが薫（竹内結子）。薫は白いスーツ姿、初々しい新妻の雰囲気登場する。そして、夫・真中（大沢たかお）との楽しそうな新婚旅行の様子が描かれるが、その幸せな新婚生活の行方は？今実家に戻った薫は健気に生きているようだが、実は？こんな脚本では多少薫の存在感が乏しくなっても仕方ないが、6人の女優の中では1番ソンの役割？

逆に、存在感が強いのが佳（広末涼子）。平凡な主婦として夫の実家で息子と共に暮らしている佳は、毎日がホントに楽しそう。佳の出産にまつわる悲しい物語が明らかになるのは後半からだ。ここに示される子を産もうとする母親の強さにすべての男は圧倒されるはずだ。佳は幼い頃から成績優秀でピアノの才能があった姉・奏と比較されたから、下手するとグレて非行少女になっていたかもしれない立場。しかも、佳の命と引き換えに母親の慧が死亡したから、「私なんか生まれてこなければよかった」という劣等感をもっていた。そんな佳がここまで明るく前向きに毎日を生き、子育てに喜びを見いだしているうえ、姉の奏に対して適切なアドバイスをするまでに成長したのは一体なぜ？

本作のクライマックスは、出産を控えて病院のベッドにいる奏に対して佳が発見した母親のメモを届けるシーン。出産の重さ、女の強さを実感する中で思わず感動の涙が溢れてくるはずだ。

## 結婚離れ、少子化の昨今、本作の効用は？

冒頭に述べたように、本作は1936年から2009年までに生きる3代の女性の生き方を問う作品だが、そのテーマは恋愛・結婚そして出産にあるから、女性の社会進出、男女平等社会の実現を目指す勢力からは「保守的」と批判されるかもしれない。たしかに、

ウーマンリブの塊だった翠が菊池からのプロポーズを受けて悩む中たどり着いた結論が、パンツからスカートに切り換え女らしくなる中でより強くなるということだから、こりゃわかったようなわからないような・・・。さらにいえば、親の意向、家の意向によってイヤイヤ結婚させられた凛だって、結局家庭に入り子供を産むことによって幸せになったのだから、所詮女は女学校に行って変な知識・教養をつけるより家庭に入ることが幸せなのだという価値観を暗に押しつけている感もある。そんな議論が入り込むとややこしくなるから、本作の鑑賞についてはその方面はシャットアウトした方がベター？

他方、2人目の赤ちゃんの命と引き換えに自分の命を失った慧もホントに幸せそうだし、シングルマザーとして強く生き始めた奏も幸せそう。また、夫を失い幸せの絶頂から不幸のどん底につき落とされた薫だって、時折寂しそうな表情をみせるものの1人で強く生きている。つまり、女たちは恋をし、結婚をし、子供を産むという営みの中、どんな状況変化が起きても強くたくましいということだ。これは、自分の命と引き換えにすることを全く厭わない慧の生き方に顕著だ。したがってそういうレベルの話になると、人間が生きる社会的価値とは？などの男の議論はふっ飛んでしまうから、私たち男は本作に登場する6人の女たちの生き方にただただ圧倒されるだけ？

目を転じて、2010年の今を生きる10代、20代の女性は本作をみてどう思うだろうか？彼女たちの結婚離れや子供はいらない症候群はかなり重症だが、それはずっと続く平成不況の中で生きていくことが経済的に厳しいという現象から生まれている一時的な症状？本作が伝える、結婚をし子供を産むことがこんなにすばらしいことなのだというメッセージはある意味保守的なものだが、こんな映画をみて逆にホッとする10代、20代の女性が意外に多いのかもしれない。本作に結婚離れと少子化傾向に歯止めをかける効用があるとすれば、それは本作のすばらしい付加価値だ。

2010（平成22）年5月27日記